

カンボジア選挙監視ミッション報告書

益田靖美（米国ジョンズホプキンス大学大学院）

2003年7月、カンボジアでの選挙監視活動に参加し、実に多くのことを経験し学びました。今回はインターバンドからも多くの方が参加され、選挙監視という活動目的は同じですが、皆さんそれぞれ自分だけの特別な経験をしたことと思います。ここでは、「私」が経験したことを元に、選挙監視活動全体について、また私自身のカンボジアでの活動について報告します。

◆「私」の活動について

私が今回インターバンドの選挙監視活動に参加することになったきっかけは、夏休みに途上国でできるインターンシップを探していた時、友人からインターバンドの活動を紹介されたことでした。その時は、今年カンボジアで選挙があることも知らず、除隊兵士支援活動のお手伝いがしたいと阪口さんに連絡を取ったところ、ちょうど選挙もあるということで参加を決めました。大学院では経済学を中心として開発を学

んでおり、また政治関係は面白いけど苦手という意識もあり、正直に
言って選挙監視は二の次という気持ちでカンボジアへ行きましたが、
実際に選挙監視を終え、その面白さに魅了されてしまいました。

私がカンボジア入りしたのは、皆さんより3週間ほど早い6月29日
でした。日本側のスタッフはまだ誰もいませんでしたが、コンポンスプー
事務所のスタッフに暖かく迎え入れられ、早速翌日から支援家庭を
インタビューして回りました。今回の私の主な仕事は、JICAへの報告
書を書くための基礎として、各家庭をインタビューし、状況をまとめるこ
とでした。途上国も初めて、インタビューも初めてという状態で、戸惑っ
たことも多くありましたが、スタッフからのアドバイスを聞き、いろいろな
面で支えられ、何とか形にすることができました。その間にも何度かプ
ノンペンへ行き、現地入りしたコーディネーターの清水さんと滞在し、情
報交換や時には観光もし、また病気の際には看病までしていただき
本当に世話になりました。また、インターバンド最大のチームが展開
したコンポンスプーにはLTOがいなかったので、清水さんと共に、PEC
やCOMFRELの事務所を訪問し、PECでのミーティングにも参加し
ました。

選挙監視のためにプノンペンへ戻った後は、支援家庭のインタビューをまとめ、ANFREL のブリーフィングに参加し、皆さんと楽しく食事を取るうちにあっという間に地方展開の日になりました。私と台湾人のパートナーの王（ワン）さんが送られたのは、トンレサップ湖の南に位置するプーサット州でした。二人とも選挙監視の経験がなく、またプーサット州には ANFREL の LTO もいないので少し不安でしたが、他の監視員や通訳の助けを借り、有意義な活動をすることができました。プーサット州での選挙活動は全体的に落ち着いており、特に大きな問題はありませんでした。私たちが注目した 2 つの問題点は、トンレサップ湖沿岸のベトナム人の住居区と、遠隔地での住人への脅迫でした。残念ながら、遠隔地へは交通の都合上での監視員も行けませんが、ベトナム人の住居区へは、私たち自身も含め、選挙前や投開票日には何チームかの監視員が展開しました。しかし、ベトナム人住居区だから起きたと特定できる問題を見ることはなく、結果は予想通り人民党の圧勝で終わりました。選挙後はまたコンポンスプーの事務所へ戻り、数日間インタビューなどをして回った後、8 月 4 日に帰国しました。

◆選挙監視活動全体について

<良かった点>

今回、選挙監視にインターバンド/ANFREL から参加して一番良かったことは、NGO として活動できたことです。私たちが展開したプーサット州でも、多くの団体が選挙監視活動をしていましたが、政府関係や大きな団体等は制約があり、活動の幅が狭められているような感じを受けました。しかし、私たちの場合は、LTO がいなかったということもありますが、ほとんどすべて自分たちで情報収集をし、考え、決定し、行動することができました。また、交通手段もタクシーとバイクを使い分けたり、開票日には私は 1 つのステーションに留まり最後まで見届け、パートナーの王さんは何箇所かを見て回ったりと、臨機応変で効率的に監視活動をすることができました。このように監視員個人の裁量に任せることは、失敗の危険も伴いますが、NGO だからこそできる気動力だと思います。また、ANFREL の監視員は比較的年齢層が低く、ほとんどの監視員がアジア地域内から来ているということで、現地の人にはなじみやすく、受け入れやすかったように感じました。実際、コンボンスプー州の CIC の職員と話した時には、選挙監視に限らずどのような支援でも、欧米諸国からのスタッフよりも、アジア（ほとんどの場合日本ですが）からのスタッフのほうが打ち解けやすく、支

援プログラムも受け入れやすいと話してくれました。さらに、これは日本には当てはまりませんが、苦勞して民主化を達成した、または進めようとしている近隣の国々からの監視員がいると言うのは、真の民主化を望むカンボジアの人々の希望となると思います。

インターバンドが、除隊兵士支援活動をしているカンボジアで選挙監視活動をしたことにも、大きな意義があると思います。事前の情報収集や、現地スタッフからの支援によってスムーズな活動ができたことはもちろんですが、インターバンドが支援している家庭を通じて、カンボジアの一般の家庭からより正直な選挙への思いや情報を得られたことは大きな収穫だと思います。私がプーサット州で監視活動をした時には、一般の人から情報を得ようとインタビューを試みましたが、こちらを警戒しているのか、正直な話を聞けたと感じることはほとんどなく、最後にはそのようなインタビューはあきらめてしまいました。ですから、現地で普段から活動をしている NGO などが選挙監視に参加するのもよいことだと思いました。また、今回のインターバンドの活動の特徴として、学部生の参加が挙げられますが、このような若い世代の参加は、（自分も含めた）これからの人材を育てる上でとても大切なこと

だと思えます。このように、経験のない人たちも参加できるというのも、
NGO ならではの思えます。

< 検討すべき点 >

これからのよりよい選挙監視活動を目指して、皆で検討したらどうか
と思う点をいくつか挙げます。まず、これは ANFREL でのデブリーフィ
ングでも言いましたが、ANFREL または NGO としての選挙監視活
動がどのようなものか、カンボジアの人々に理解されていないという点
です。私たちの通訳が指摘した通り、投票所に来ている人々は、私
たちが何者であるか分からず、カンボジア政府から派遣されているので
はないか、自分たちの行動がどこかへ報告されてしまうのではないかと
不安に感じています。各国政府の代表や、NGO でもどの国から来て
いるのか分かりやすい団体は、一般の人々に不安を感じさせることは
少ないと思えます。しかし、ANFREL のよう各国の寄り集まった小さ
な NGO は、地域の人々に自分たちの中立性をアピールするような宣
伝活動も必要だと思えます。

また、地方展開する際のパートナーの組み合わせを、もう少し慎重に
考える必要があると思えます。プーサットチームは、私もパートナーの王

さんも選挙監視活動は初めてで、しかも LTO もいませんでした。幸
い、私はコンボンスプーでの PEC 等の訪問や、コーディネーターの清水
さん、LTO の安藤さん、岡田さんから事前に選挙監視についていろい
ろお話を聞いていたことから、だいたいの活動内容はつかめていました
し、王さんも海外での経験が豊富で、とてもしっかりとした頼れるパー
トナーだったので、何とか初心者二人でも選挙監視活動を終えること
ができました。ANFREL の参加者自体に経験者が少なかったことも
あり、仕方がなかったのかもしれませんが、パートナーの組み合わせによ
っては、地方に展開してから何をしたいのかまったく分からないという
状況に陥る危険もあると思います。

今回私が一番反省しなくてはいけないのは、プーサット州の
COMFREL 代表とトラブルを起こしてしまったことです。これは、お互
いの意思疎通がうまくいかず、COMFREL に余分な手間を取らせて
しまい、代表が私たちと私たちの通訳にまで悪感情を抱いてしまった
ということです。原因としては、LTO がおらず、COMFREL と
ANFREL がどこまで協力して活動するかということがよく分からなかつ
たこと、また、私たちが言ったことを相手が正確に理解したかの確認を
怠ったことが挙げられます。このトラブルは、私たちよりは、小さな社会

でこれからも COMFREL 代表と付き合いがなくなっていく私たちの通訳にとって大きな問題となりました。このように、現地の人とのトラブルは、その地域に住む通訳やドライバーにとって深刻な問題になり得るということを、常に意識して活動をしなくてはならないと思いました。また、母国語でない言語でコミュニケーションをとる際には、重要なことは多少しつこく確認することが必要だと思いました。

インターバンドと ANFREL の関係にも疑問に思った点があります。もちろん、より多くの監視員がいるのはよいことですが、ANFREL の規模を考えると、約半数がひとつの NGO からというのは少し不自然に感じました。考えすぎかもしれませんが、大きな団体がいることによって、個人で来ている監視員が違和感を持ったり、日本人の数が増えることによって、ANFREL の「アジア各国の人々が集まった民主化を支えるための NGO」というカラーが薄くなってしまふ恐れがあるのではないかと思います。もちろん、これは ANFREL 側が、インターバンドなどの NGO とどのような協力体制をとっていくかという問題ですが、インターバンドとしても少し考えてみるといいと思います。

◆「私」の視点から

<良かった点>

最後に、少だけ私個人にとっての反省をしたいと思います。まず、私にとって今回の活動で一番良かったことは、インターンとして選挙前後にカンボジアにおり、いろいろな人と話す機会が多く持てたことです。それによって、短期間だけでは分からない選挙の動きなどがよく分かり、また、それを実際の選挙監視活動に生かすことができました。さらに、LTOのいないコンポンスプー州で事前の情報収集に貢献できたことは、自分の活動に対する自信をつけてくれました。

また、除隊兵士支援活動を含めた今回のカンボジアでの経験は、私のキャリアにとって大きな一歩となりました。まず、たいしたことではないように見えて私にとって大きな収穫だったのは、自分は途上国でも生活していける、そんな生活を楽しむことができるということが確認できたことでした。開発を勉強している割には途上国へ行ったことのなかった私にとって、途上国での生活をしていけるかどうかというのは、将来のためのひとつの試験でした。今回は1ヶ月程度だったので、数年にもわたる生活となるとまた違ってくるとは思いますが、カンボジアの田舎で生活すること自体が良い経験となりました。また、今回の活動

は、大学院での勉強に疑問を感じ始めていた私にとって、やはり学校の勉強は大切だと確認させてくれました。もちろん、学校で頭に詰め込んだ知識が実際役に立つことは、今回のようなフィールドワークではほとんどありませんでしたが、問題に取り組む際の姿勢、組織立った考え方、解決策を引き出すための働きかけなどは、学校で学ぶことによって培われるものだと思います。また、自分はこの分野に関しては少なくとも人並みには勉強してきているのだという自信は、実際に仕事をする上で大きな糧になると思います。また、フィールドで働いてみて、これからあと1年、どのような勉強をしたいかということも明確になりました。この経験を元に有意義な学生生活を送りたいと思います。

< 課題点 >

今回カンボジアに行って反省したのは、もっと事前にカンボジアについて勉強してればよかったということです。インターンシップをすると決めた時点では、カンボジアについてほとんど何も知らず、少しは本などを読んだのですが、きちんと勉強していればもっと有意義な1ヶ月を過ごせたのにと悔やんでいます。また、ANFRELへの報告がきちんとできなかったことも悔やまれます。選挙監視中の3日間の報告書は、時

間が限られていたためきちんとまとめることができず、また、選挙後もお世話になった ANFREL のスタッフとろくに話をすることもなくブノンペンを離れてしまい、自分のした選挙監視活動がきちんと ANFREL へフィードバックできたのか不安が残ります。

帰国後も、今回自分がした経験についてまとめた考えができていません。仕事もなく暇なはずなのに、この報告書もなかなか手をつけることができず、書きながらも、私が選挙監視をした本当の意義が何だったのか分からずにいます。しかし、今それを無理に見つけ出す必要はないのかもしれません。カンボジアへ行って選挙監視をした、その経験が私の体に染み付いた、今はそれだけで十分な気がします。もしかしたら、5年後、10年後のある日突然、「そうか、私があの時カンボジアでしたことはこういうことだったのか」と分かる時が来るかもしれませんが、来ないかもしれません。どちらにしても私が2003年の夏に心の底から楽しいと思える体験をしたということには変わりありません。

Copyright ©2002-2003 InterBand All rights reserved.